

世界動物事情

フィリピンで、動物保護法により犬の食肉処理が禁じられているにもかかわらず、犬肉のヤミ取引が後を絶たない。「犬食文化」が一部に根強く残っているからだ。

特殊警察部隊のネルソン・ヤブート主任調査官は、

今年九月、二度にわたって犬肉業者摘発作戦を指揮、十人を逮捕し百八十二匹の犬を保護した。同調査官によると、保護した犬のほとんどが「マニラ近郊のケソン州やラグナ州、バタンガス州で盗まれた雑種だった」という。「市場」とし

フィリピン

ては、北部地域、特にバギオ市やパンガシナン州が有名。こうした地域では、「滋養強壮に効果がある」など一般に信じられ、犬食の伝統が

「犬食」免れ、飼い主待つ

根強い。ピテホールなどで、アドボ、カレカレなどといった伝統フィリピン料理に混ぜられることもあるという。

「小遣い稼ぎのため一般人が犬を盗むケースが多い(ヤブート主任調査官)だけに、取り締まりが難しいのが現状だ。」

同調査官らが九月に保護した犬は現在、マカティ市(ヤブート主任調査官)とマニラ市の動物収容施設で飼いが現れるのを待っている。

「かわいそうだけど、一度にこんなに保護されてはいい困いの中に犬が詰ま

「かわいそうだけど、一度にこんなに保護されてはいい困いの中に犬が詰ま



マニラ首都圏マカティ市の動物施設に収容された雑種犬たち

を振って近づいてくる犬が目立つ。中に入ると、うれしそうにじゃれついてくる犬さえいる。飼いだであったことは一目りょう然だ。しかし、これまで返還を求めて施設を訪れた飼い主は一人もいない。「雑種犬で価値がないし、引き取りに来る際の交通費や手数料がかかるからでしょう。高級犬なら新たな飼い主を探すのも簡単だけど」。

百三十匹を収容したマカティ市の施設を訪れた。狭い囲いの中に犬が詰め込まれている。

犬は、引き取り手が見つからなければ、条例に基づいて保護から六か月後には処分されることになっている。

(マニラ 源一秀、写真)